

映画「痛くない死に方」から学ぶ

原作は尼崎で年中無休のクリニックを開業している長尾和宏医師によるものです。「きょうと福祉倶楽部だより」前号でご紹介した著書「痛い在宅医」がベースになった在宅医療の物語です。



在宅で父が望む形で最期を看取りたいと願う娘。

その願いを叶えるための在宅医を探し出します。

ところがその願いは「痛い在宅医」河田によって打ち砕かれてしまいます。河田は自分の施した医療は

「これで良かったのか」と自問し、訪問診療を長年続ける先輩の長野医師に助けを請います。

長野は言います。

「大病院の医者は臓器を診る」
「俺たち町医者は物語を診る」と。

そして長野のクリニックで勤めだした主人公は「痛い在宅医」から「痛くない死に方」を患者さんと共に作る医師に成長していきます。

臓器を見る医師であれば物語を完結させることは仕事ではなくなります。物語を診る事が仕事ならば、より良い物語を完結させるためにその患者さんとともに歩みます。後者の道を彼は選んだのです。

わたしたちが望む人生の閉じ方を考えさせてくれる作品です。「痛い在宅医」河田が「痛くない死に方」を提供する医師になり看取った本。

彼の作る川柳も考えさせられます。「尊厳死、遠くの親戚 邪魔をする」残念ですが京都での上映は終わりました。ぜひ再び上映されることがあれば医療福祉関係者、これから見送る人、見送られる人に鑑賞して頂きたい映画です。

わたしもこの映画、観てきました。

きっとそういう事なのかな…

産まれてきたら誰にでも訪れる。死ぬということ。

自分なりに作品を理解するならこういうことかな。

ただただ目の前の病気に立ち向かうだけが医者じゃない。

目の前の人と相對してこそ病氣と戦える。

病氣を診ると言うことは、その人を診ると言うこと。

どうケアするのか？

その人が人生の最後に何を思い、最後の時間をどう過ごし、

どう死にたいのか

心から對話し、その人に寄り添いその人を診る。

人と人との繋がりから生まれる何かが終末期医療や在宅医療の世界には必要なのかもしれない。

向き合うのは病氣に対するマニュアル通りの対処方法ではない。

向き合うのはその人。

介護の仕事をしていると人よりそういう場面に遭遇する確率は多くあります。

今までどれだけ介護させてもらっていた方が、自分らしく逝けたただろうか…。あの人はどうだっただろう…

などと思います。

最後にリビングウィル…日常生活ではなかなかお目にかからない言葉ではあるけど

本来、身近なものなのだと思います。

戦後75年、初めての体験。コロナで「死」ということが我が事として身近に迫ってきている。

穏やかな尊厳死という最後が迎えられなくなっている。

コロナに罹患すると大切な人たちと引き離されてしまう。

このコロナの世界が早く終わってほしい…。

と改めて思いました。

きょうと福祉倶楽部 西浦